SADA

SAKAI DESIGN ASSOCIATION

堺デザイン協会

No. 15
平成5年10月20日

百舌鳥八幡

SaDA新春懇親会と講話

平成5年1月28日（土）、堺市百舌鳥赤畑町にある百舌鳥八幡宮で、恒例のSaDA新春懇親会が開催されました。ゲストには博覧会研究協会理事長木村一雄氏、百舌鳥八幡宮宮司工藤俊之氏をお迎えし、木村一雄氏「絵馬について」工藤俊之氏「百舌鳥八幡宮由緒」をテーマにお話を伺いました。絵馬の起源とその発展について、百舌鳥古墳地帯や八幡宮に係る数々のエピソードなど、興味深い話に耳を傾け充実した一時を過ごしました。

■「絵馬について」講話要旨

木村一雄氏

AD700年頃と推定される馬の土偶が出土されるが、これは雨乞いや日乞いのための神事に使われたものであろう。古くから馬は乗用や軍用として貴重な動物であるとともに、神に仕える神聖な動物とされてきた。この貴重な馬を奉納するという風習があった。しかし生馬を奉納できない場合は、絵に描いた馬すなわち「絵馬」を奉納することとなり、平安末には広く行われていた。

その後「板に描かれた願望」という民間信仰的な絵馬が広まっていく。特に子供の病気平癒という親の願いが、例えば子供の夜泣き封じには「鶏の図」として、疱瘡には「武者の図」、癇虫や諸病には「違い鎌の図」、目の病には「八つ目の図」など数多くの図柄として描かれた。また安産や子授かり祈願として「柘榴の図」や、入浴を嫌う子供のための「母子入浴の図」などもある。

室町時代後期には絵馬の大型化が流行し、専門絵師が登場して活躍することとなる。又この立派な絵馬のために「絵馬堂」が建立され、絵馬鑑賞のための画廊としての役割を果たした。庶民の願い・祈りをカタチにした小絵馬と、権力の移行に伴う廻船問屋のポスター的な役割をもった大型絵馬など、絵馬の多様性は興味深いものであるとともに、科学時代、コンピュータ時代といわれる現在でも心のよりどころとして「人間が救われるもの」を求めつづけるということを、絵馬を通じて考えさせられるのではなかろうか。

■百舌鳥八幡宮由緒について

工藤俊之宮司

百舌鳥八幡宮は堺市の小中学生の見学コースになっている。先生や生徒からの質問の中で最も多いのは「百舌鳥八幡宮の起源はいつか」というものだが、これには答えられない。建物がいつ建ったかは明確だが、起源となると、それを探るには神話や古文書、又遺跡から発掘され祭事に使われたと思われるモノから時代を推定するしかない。

当地百舌鳥地帯から発掘されたものに「猪の埴輪」があるが、これは全国的にも珍しいものであり、7世紀頃のものと推定され、祭事に使われたと判断していいのではないかと思われる。又記録として残されているものでは、現在滋賀県長浜町に応安6年銘の古梵鐘があるが、この鐘はもともと百舌鳥八幡宮の代物であったものだと判っている。山城石清水八幡宮にある古文書の記録には、百舌鳥八幡宮は石清水八幡宮の別宮であると記載されている。『八幡大菩薩』といわれるが、これは仏教伝来すなわち異国文化の導入と、それに対する人心の反発の中での調和の精神の表われであろう。

当地百舌鳥は漢方薬として有名な「反魂丹」の発生の地である。明国との貿易の中で伝わったもので、堺の万代氏の秘伝の薬として全国に広まっていった。

又百舌鳥八幡宮では、古くより年末から正月にかけて精進料理を食べる習慣が「モズ精進」として現在も続いている。この習慣は、当地一帯に疫病が発生したときその予防策として生まれたのではないだろうか。　（文責　高木外）

平成４年SaDAアンケート

第14号に引き続き、アンケートの特集をいたします。が、意外にアンケートの回答が少ないのであります。ご多忙のゆえと推察いたします。企画いたしました者といたしましては、深く反省の日々となりました。ご自身のことは一番書きやすいことではないかと、それもなるべくやさしい答えやすい質問を考えたつもりですが、残念でございました。

少々プライバシーに入り込み過ぎたせいかとも思います。質問が時代遅れのつまらないもので答えるに値しない代物であったのかという不安めいた反省もあります。

にもかかわらず、早速にご回答をお送りいただきました皆様には心からお礼申し上げます。いつかまたもっと面白いアンケートを研究いたしまして、おじゃましたいと思います。ありがとうございました。

SaDAアンケート'92

Q1：貴方の近況をお知らせください。お仕事の様子、ご家族の様子、このごろ考えることなど。

Q2：最近貴方がデザインされた作品、発刊された著書、研究、講演など、活動の状況をお知らせください。作品など、写真＋簡単な説明をお願いします。

Q3：20世紀も残り少なくなりましたが、貴方の選ぶ今世紀最高のデザインを挙げてください。

垣村　三平

［最高の品質］

Q1：古く江戸時代の豪商は、家業の繁栄と家座の維持・拡大を目的に、家訓や店則を制定して、何代にも亘って継承してきた。その内容は、それぞれの家業によって異なるが、例えば「身分のほどを知れ」、「先祖の恩に報いよ」、「正路（正直）に商いをせよ」、「算用に勤めよ」とか……その定めは「妾宅・下女に手をかけるな」までに及び、驚くほど詳細に書き留めている。

片や現世の大手商社や中小の企業においても、これらの家訓というべき何条かの社訓を取り決め、社運をかけてひたすら業務に専念しているところが、案外多いのではないかと推測する。

ところが、私の勤めている京都西陣・能村美術織物では、他社とは趣を異にした「最高の品質」のみを社訓とし、社内のあちこちに標示して、その徹底を図ると同時に、社訓の理念に徹した、能村独自の美的価値の高い織物の製作に取り組んでいる。

そこでこの社訓である「最高の品質」とは、一体どういうことかを考えてみると、それは単なる品物の質が良いとか悪いとかではなく、あくまでも美学を志すことを意味しているのである。

例えば、正三角形でいうならば、高さが「質」、底辺が「量」として、三角形の頂点が「美」であり、この頂点こそが目標とする「最高の品質」にあたるとしている。

そして「最高の品質」の中には、品位のある完璧ともいえる形状や色彩のほか、斬新性や使用・耐久性、適正な価格など、総ての条件が含まれていて、その一つでも欠陥があれば、決して「最高の品質」とはいえない。

また顧客に対しては、何よりも喜んでもらえる商品を提供する、行き届いた内容のサービスをする等々も、拡大解釈すれば「最高の品質」に該当するのではないかと考える。

ともあれ、この社訓に添ってわれわれ従事者は、どう対処すればよいかであるが、それは先に述べた三角形に例えれば、「今日の三角形よりも、明日の三角形を如何に大きくしていくか」であり、大きくするための自らの努力が最も必要になってくる。

即ち、三角形が大きくなればなるほど、「質」の尺度は高くなり、頂点にある「美」の世界も拡大するし、絶えず「美」の追求と展開をはかることで、ひいては社会への貢献に繋がるといえよう。

さらに、山あり谷ありの道のりを時間をかけ、小さい山から大きい山へと踏破していく心構えで山登りをする努力の蓄積が、やがては頂上にある「最高の品質」に到達できる道であり、成果をあげるためには常に心すべきことである。（新入生教育にあたり、一部このようなことを述べている。）

フィレンツェライフ青山・外観

金子　誠之助

Q1：この度、6年間お世話になった大学を退職しました。会社人間から大学へと転進し、小生に何が出来るかと自問自答しながら、現場でのデザイン業務の経験を授業の中に取り入れ、基本技術を中心に指導しました。今後も週1・2回出校しますが、デザイン業務も続けながら頑張りたいと思っています。

Q2：2・3年前、日本では本格的な純客船が次々と建造され「客船ブーム」と言われていました。バブル経済の最中でレジャーの楽しみ方が、速く外国へ着く航空機より、船中の生活を楽しみながらゆっくり旅をする人が多くなってきました。明治以降日本で建造された代表的な客船がどのくらいあるのか、その航路はまたその行末は!! 戦争中には優秀な客船が航空母艦などに数多く改装されたとも聞いているので調べてみようと、現在資料を収集中です。もちろんインテリアを含めてですが、皆さん資料をお持ちでしたら、情報をお知らせ頂きますようお願い致します。

Q3：インテリアを中心に考えた時、加工技術の進歩と、材料革命とも言われている新材料の開発と、その特性を生かしてデザインされた作品が数多くあります。（木材、金属、プラスチック、裂地などの作品）

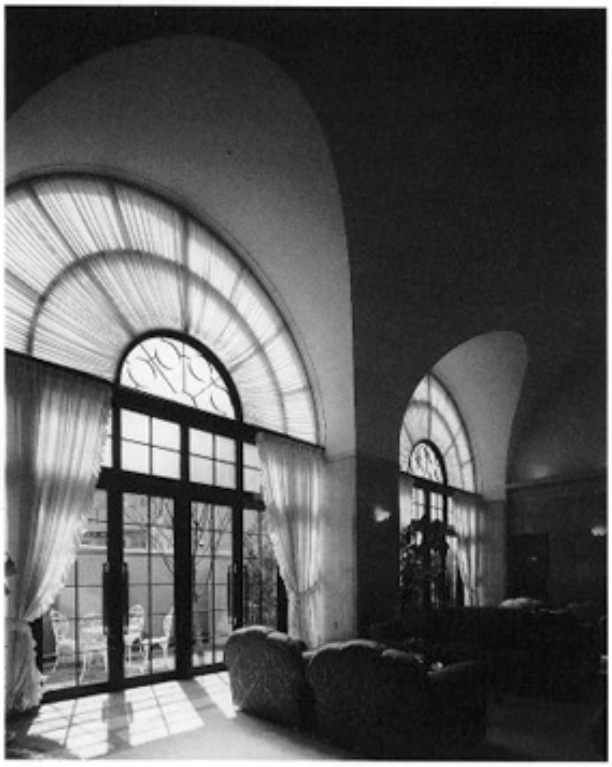
崎田　公明

［この頃考えることなど］

上の子供が今春大学4年生、下の子供がやはり今年の4月から高校3年生の4人暮らし。まだまだ物入りが続くと考えていた矢先、中野孝次著の「清貧の思想」を読んだ。元阿弥光悦・妙秀親子、鴨長明、良寛、池大雅、与謝蕪村、吉田兼好、松尾芭蕉等、彼等の生きざまはまさに物欲から解放された、真の自由人、人は生きてゆく上で必要欠くべからざるだけの物があれば、それ以外の物など何も持たないのが精神活動を自由にするという説。それにどんなものでも売れればよしとしてきた原理や、経済的効率至上主義をもって生産するのを誰も疑わなかった今の物質文明には誤りがあったのではないかという論。もやもやした自分の中にひとすじの清水が通りぬける思いがし、この辺で「足りたるを知る」気持ちも必要とわかった。

日常の仕事は例にもれず先行き不透明、比較的官庁の仕事が出ている。バブルの崩壊後これからが、いよいよデザイナー個人間の格差が現われてくるとは内田繁の弁だが、ますます我々もその真価が問われることになってくるのだろう。発注者においても、デザインコンセプトをしっかり描きつつ一味違ったものをという要求が続いている。老人保健施設の「アゼリア（つつじ）ガーデン」「コスモス楽寿苑」高年者福祉ルネッサンスを目指した有料老人ホームの「フィレンツェライフ青山」を最近完成させた。

今世紀最高のデザインはスペイン・バルセロナに建設中の教会「聖家族教会―サグラダ・ファミリア」ではないだろうか。1884年から建設が始まって現在に至り、完成までにあと150年とも200年とも必要といわれている。信者の浄財を集めながらの工事であることにもよるが、30年程で建て替えるのを当たり前と考えている我々に、何かを語りかけてくるプロジェクトというべきだろう。



フィレンツェライフ青山・ロビー

桑原　正嗣

Q1：この4月、勤め先（福助株式会社）の本社機能が、創業110年にして初めて堺の地を離れ、大阪・弁天町に開発された《ORC200》のノッポビル、《オーク1番街》へ移りました。

東京の《アークヒルズ》にあやかった《ORC200》のオープニングイベントには、ロスのユニバーサルスタジオ監修になる、体長20mのキングコングがビルによじ登り、環状線や高速道路から見るモノ好きたちを、唖然、茫然、愕然、顎然、鰐然とさせたのであります。

身長200m・50階建の《オーク1番街》ビルは、20階以上が豪華けんらんのベイタワー・レジデンスと三井アーバンホテル。19階の私の窓からは凸凹都市大阪を一望、よく晴れた日には、淡路島から四国までが視界に入ります。お近くへお越しの折には、是非お立ち寄りください。

Q2：〈広報SaDA〉専属ライターの私といたしましては、12号の「オラトリオ《ダビデ王》の大阪初演!!」と13号の「クリスト・アンブレラ展」、この2つのレポートが最近の著作物のすべてであることを証言します。

Q3：神をも畏れぬ大胆素敵なご質問ではありますが、前記レポートでオマージュを捧げたいきさつもあり、やはり、クリスト・ヤバシェフ氏の"Earth Works"とお答えせざるを得ません。

コロラドの峡谷やマイアミの島々やパリのポン・ヌフを梱包し、そして近くは、カリフォルニアの砂漠と茨城県の田園風景の中に3,000本に余る巨大な傘のお化けを登場させたその所業?!

「壮大なバカバカしさ」とも映る地球規模の大パフォーマンスによって、管理社会の効率主義にあえぐ私たちに束の間の夢を見させてくれた功績を、高く評価するものであります。

CMブレイク：「ニッポンは疲れる!!」（ビートたけし）

辻　哲男

公表するほど立派な仕事はしていないし、発刊した著書もないし、研究・講演もしていないので、最近の家族の様子を書くことにしよう。

ある日、晩酌を楽しんでいる私に向かって小学4年の息子が、「脱皮ってなに？」と聞いてきたので、セミの抜け殻を例にあげ、人間も10歳になったら体の皮がむけるんや、と教えをたれた。ところが何日かして「父上、この前の話友達に聞いたけど、皮むけた子、誰もいてへんかったで。僕もうすぐ10歳の誕生日やけど、ほんまに皮むけるんか？」と聞いてきた。どうも本気にしていたらしい。今さらあれはウソ、軽〜い冗談といって子供の心に傷をつけてもいけないので、人によって必ず10歳にむけるとは限らないし、一生むけないで過ごす人もいると説明し、それから何でもかんでも人にべらべらしゃべるもんではない。男のシャベリはイケマセン！と説いて聞かせておいた。

その時はそれで済んだが、あれから何も言ってこないのでほっとしている反面、もしかしたらユーモアの理解を通り越して、単なる嘘つきの親と思われているかも知れない、そう思うと心配で仕事も手につかない今日この頃なのである。

山崎　晶

Q1：転職して1年半が経ちます。ある問題を見つけ、その解決を目的として願いを実現させようとするプロセスこそがデザインだとして、教育もまた同じことではないかと、新任教師の言葉として学内誌に書きましたが、問題はどうやら教師としての自分自身にあるようです。問題解決にはだいぶ時間がかかりそうで…。

Q2：作品としては自分の担当する学生それぞれということになるのでしょうが、未だに自信作はありません。願いが大きすぎるのかも知れません。いつかとんでもない傑作が出来上がることを信じて続けていきます。ご期待ください。

Q3：エスカレーター／階段を動かした発想に敬服しています。エレベーターに比べてスピードでは負けますが、待つ間がなく、人の大きな溜りが出来ないのがいい。転じて、自動的に進学・昇進出来る仕組みを言う場合にも用いられます。

映画の中でもエスカレーターにまつわるロマンチックシーンなんてものの記憶はありません。この点では階段やエレベーターに席を譲ります。話題になった螺旋エスカレーターはあまり感心しません。技術がデザインを離れて独り歩きした結果ではないかと…。螺旋階段とは目的も雰囲気も全く異なります。

3年ほど前ニューヨークのメーシー百貨店で木製のエスカレーターに出会い、えらく感激しました。ひょっとしたら前世紀のものかも知れません。香港では地下鉄に降りるエスカレーターがごうごうとでっかい唸り声をたてて猛スピードで走っていましたが、あれは怖かった。

エスカレーターでは歩くべきか、止まっていていいのか賛否が分かれるところ。動く階段としたら歩くほうがいいと思うけれど、あの蹴上の大きさでは歩きにくい人も多いと思うし…。

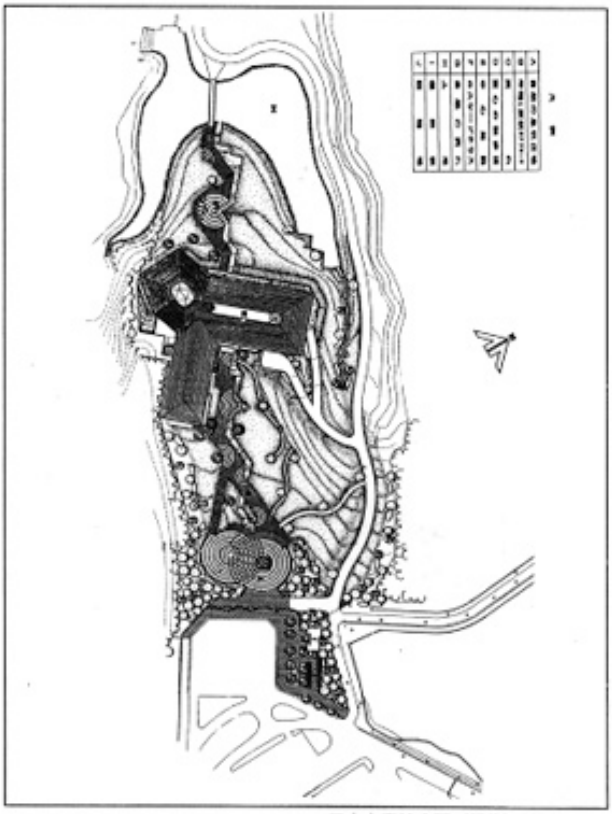
いろいろ問題のある代物ではありますが、南海高野線の中百舌鳥駅で毎日地下鉄に乗り換える者にとっては、エスカレーターは神様・仏様にも思われて…。

森　和雄

Q1：世紀末の10年を気ままに過ごしたくて、そして少しばかり生き急ぐ必要のある残りの人生を、より多く自然と向き合える仕事をと思い、20数年携わった工業デザインの世界を離れ、造園を主体とした建設コンサルタント会社で公園・緑地の設計をしています。今、我が家のペットはメダカにザリガニ、オタマジャクシにヤモリです。

Q2：今の会社に転職して、初めて設計を担当した兵庫県立三木山森林公園が、この5月に開園しました。担当したのは90haの敷地のうちの、中心施設まわりの2ha程ですが、見様見真似の設計でも、何とか出来上がってほっとしています。

Q3：ボイジャーⅡ号に乗せられた、他の宇宙生命体へのメッセージがデザインされたディスク。地球が消滅しても宇宙の果てに向けて何万年も飛び続ける人間の存在を示す記念碑。



三木山森林公園（仮称）計画平面図

堺・今・昔

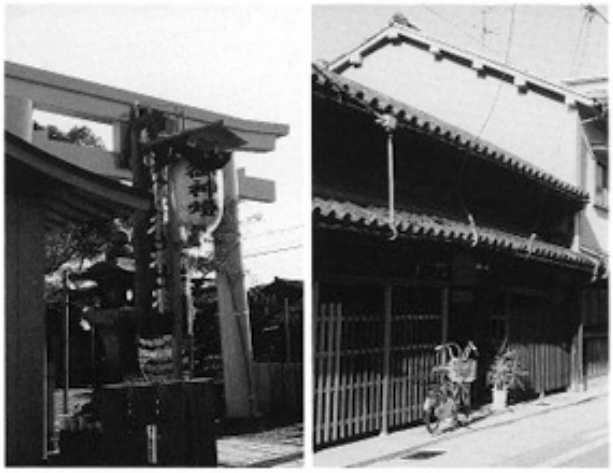
紀州街道

老　健一

第13回で大道筋を紹介しましたが、紀州街道が綾之町から御陵前に到る幅広い道であることから、堺を南北に貫く紀州街道の部分を大道筋と言ったものであります。

紀州街道は江戸時代、大阪の高麗橋を起点に堺の大道筋、石津、浜寺を経て紀伊の和歌山に到る道で、参勤交代の大名や商人で賑わったと言いますが、大阪府の資料によりますと、中世では紀州街道は、都の貴族や官人が行き来するほどの大きな道ではなかったとか。それよりも堺浦から泉州沖の海上航路が盛んであったと伝えています。元禄4年（1691）10月に文献上に紀州街道が初めて出てくる由。宝永元年（1704）大和川開鑿と新川橋（大和橋）の架橋から、摂津、和泉、紀伊を繋ぐ主要道路として定着したと言います。大道筋を出た街道は、湊村に入りますが、この村には高級焼き塩が生産される外、鍛冶屋、製紙屋など堺につづく工房村として名を成していたようであります。

今この辺りに湊の天神さんと親しまれている、船待神社がありますが、菅原道真が太宰府へ下る途中、ここで船出を待ったという故事によると、神社の略記にあります。堺市が五街道の一つとして紀州街道を整備されていますが、大道筋から入った旧道付近（船待神社の近く）がもっとも往時を偲ばせてくれる道筋であると、神社で伺いました。



紀州街道の船待神社と民家

街道沿いに格子の嵌った民家があって、昔の紀州街道の賑わいをふと思い浮かべたことでした。

ズームアップ

平成版大衆壁画

山崎　晶

人類は、旧石器時代の昔から壁に絵を描いてきた。壁の内外にさまざまの目的をもって描かれたモチーフは、神、人間、動物、自然、革命、戦い、生、死、愛など、数えてもキリがない。メキシコの壁画運動に見られる民族主義と社会思想と芸術活動のコンプレックスは、壁画の持つ大きな力を世に示した。数多くの壁画が高く評価されるのは、それらがいつも優れた芸術性に裏付けられている場合だと思われる。

そして今、泉北ニュータウン茶山台2丁目の公団住宅に現われた2つの壁画は、少し面白くて、やがて寂しき問題作。“これでいいのか”と思いながらバスの窓越しに見るこの壁画、連日のことながら、意外と見飽きない。

国際刃物デザインコンペ '92 in SAKAI 入賞発表

平成4年11月「暮らし　ひ・ら・め・き」をテーマに、堺刃物イメージアップ推進協議会が主催した〈国際刃物デザインコンペ'92 in SAKAI〉には、国内から152人・189点、海外から18カ国112人・141点、合わせて264人・330点（前年度は280人・348点）の応募があり、相変わらずの人気の高さをうかがわせました。

12月11日、堺デザイン協会事務局長の岡村さん、賛助会員・堺刃物商工業協同組合理事長の滝川さんを含む8名の審査員による審査会において入選作品が決定され、平成5年2月13・14日にじばしん南大阪で行なわれた「第6回堺刃物まつり」で表彰式と応募作品の展示会が開催されました。

《グランプリ》は、オーストラリアのCHRISTOPHER ROBERTSONさんデザインの『KITCHEN KNIFE』が獲得。《金賞》には同じくオーストラリアのJEREMY JONESさんの『YUBI』と、千葉県の住友太郎・高嶋明さん共同制作『Knife↔Scissors : Little Claw』の2点。その他優秀賞として5点の作品が受賞しました。

審査講評によれば、平均的に作品のレベルが上がってきており、作り手のポリシーや目的が具体的になっていて、作者の「顔」が見える。全体的に既存の刃物のイメージを超えたデザインのものが多く、完成度の高いものや、今後の可能性を感じさせるものである。特にグランプリに選ばれた作品は、形・サイズ・質感などさまざまな要素がトータルにデザインされたもので、従来必要不可欠とされていた刃の根元の角を取った形に見られるように、既存の包丁のイメージを超えた作品として評価される。外国や若い人からの作品にデザイン的な工夫が見られ、これらのユニークな発想は、これからの堺刃物業界の刺激になるのではないか。ということでありました。

▲グランプリを受賞した『KITCHEN KNIFE』

▲金賞を受賞した『Knife↔Scissors : Little Claw』

▼金賞を受賞した『YUBI』

編集後記

全くの素人ながら、下手の横好きでここまで編集を続けてこられましたのは、皆様のおかげです。幾度も発行の期日に間に合わせることができなくなり、大変なご迷惑をおかけいたしました。にもかかわらず、いつも温かいご厚情に励まされてここまでやってまいりました。世界も堺も大きく変わろうとしております。今号でSaDAも編集担当は交代いたします。次号からの新しい紙面にどうぞご期待ください。（山崎）

会報 SaDA 15号
平成5年10月20日

発行　堺デザイン協会
〒590 堺市向陽町1-1-7 オカムラデザインプロ内 TEL.0722-29-5011
編集　堺デザイン協会広報委員会